## 帝都東京を中国革命で歩く

譚璐美著
白水社　2016

| 所蔵館 | 請求記号 |
|---|---|
| 本　　館： | K/291.36/Ta83 |
| 神田分館： | /291.36/Ta83 |

**[著者プロフィール]**
**譚璐美（たん ろみ）**
1950年5月17日生
在日華僑のノンフィクション作家
慶應義塾大学訪問教授

---

**土 屋　昌 明　（経済学部教授）**

現在の中国語のなかには大量の日本語がまじっています、と言ったら、ウソでしょ、と思うかもしれない。ウソではなく、ホントです。私たちの身のまわりの言葉で、中国語になっているものが大量にあります。たとえば、図書館、教室、黒板、教科書、大学生などなど、初級中国語で、200個は優にあります。日本の大学生は、みんなこの事実を知りません。中国の大学生も、この事実を知りません。

だって、日本の漢字は中国から来たんでしょ？

中国がもとじゃないの？確かに、漢字は中国から来たのですが、こういう言葉は、明治時代以降、日本で作ったものなのです。それを、20世紀初頭、中国人留学生が日本で勉強し、それを中国に持っていった。日本の学術を中国に紹介したとき、日本語の言葉をそのまま使った。言葉には歴史がこもっているのです。

そうすると、彼ら中国人留学生たちの歴史的役割は大きい。その彼らの多くが、東京に住んでいました。そして、専修大学神田校舎の近辺は、彼らが住んだり食べたり、勉強したり本を買ったりしたところです。もちろん専修大学に留学していた中国人学生もいました。

かの有名な中国の政治家、周恩来（1898～1976）総理は、十九歳のときに、いまの専修大学神田校舎8号館のウラあたりに住んでいました。黒門をくぐったかもしれません。彼は寂しくなると、中華料理屋に行って気を晴らしたのですが、そのお店は今でも駿河台下にあります。ほかにも、中国近現代史の重要人物がたくさん、かつて東京をうろついていたのです。

彼らの足跡を追ったのが、本書『帝都東京を中国革命で歩く』です。本書を頼りに、百年前の東京と、そこで勉強していた留学生を思いつつ、現在の東京を見てまわると、東京という都市の別の一面も見えてきます。ちなみに、十九歳の周恩来の日記を日本語で読みたい方は、矢吹晋編『周恩来『十九歳の東京日記』』（鈴木博訳、小学館、1999年）が本学図書館に所蔵されています。